繁－28

【キーワード】
資金繰り重視，段階的規模拡大，事業活用
低コスト生産，省力化，衛生対策

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　繁殖経営（法人：株式会社）

2　構成（労働力）
本人，従業員3名，パート2名

3　飼養頭数
繁殖雌牛250頭，育成牛50頭

4　飼料作物
夏　作：ソルガム　12ha，WCS　4ha（水稲農家と契約）
冬　作：イタリアンライグラス 16ha
稲わら：4ha（地わら収集）

5　経営の特徴

・生産牛約300頭飼養の法人経営で，各種省力化技術の導入や衛生対策の実践により，分娩間隔約370日，市場価格比110％を実現している。

・母牛個体の状態把握や肉用牛情勢を見ながら，必要に応じて，育成牛販売，妊娠牛販売等も行いながら，資金（自己及び借入）の回転を重要視した経営を実践している。

・多頭化に伴う各種対策を地域に先駆けて取り組んでいる。（ドーム牛舎やスタンチョン利用による群管理，昼間分娩技術や，オカラ給与，ロールベール体系の確立，人工哺育，ワクチネーション・消毒体系の確立）

6　今後の目標
・地域に密着し，地域の稲わら，水田を最大限に活用（裏作等）した低コスト経営を目指している。→自給飼料生産部門の拡充，会社設立。
・受精卵移植師の技術も活用し，優良雌牛を増産確保する。
・目標飼養頭数は500頭。

【経営発展の経過】

H元年	農業大学校卒業後後継者として就農（繁殖雌牛30頭）
H3年	借地による飼料畑拡大（55頭，飼料畑面積350aへ）
H4年	スタンチョン利用牛舎建設（60頭）
H5年	ロールベールサイレージ体系導入（70頭）
H7年	人工哺育技術導入（80頭）
H13年	認定農業者認定（150頭）
H14年	家族経営協定締結（両親と後継者夫婦間）（180頭）
H15年	採光性牛舎（ドーム牛舎）建設（180頭）
H17年	哺乳ロボット導入（210頭）
H20年	繁殖牛淘汰更新事業利用により母牛の選抜更新（150頭）
H22年	強化哺育技術導入（200頭）
H24年	父より経営移譲，雇用導入（200頭）
H25年	TMR飼料の生産・給与開始（250頭）
H26年	法人設立（300頭）

【経営発展の過程で苦労した点】

①後継者として就農後，人工授精技術を含め，経営安定のための管理手法の習得に期間を要した。特に年1産達成のための飼養管理の習得，個体情報の把握・管理徹底にパソコンの活用が大きかった。

②増頭するにあたり，飼料畑面積拡大や機械投資において資金繰りや収入確保に苦労したが，借地中心の拡大，各種補助事業（降灰事業など）を最大限活用して対応した。

③常に多頭化に伴う事故防止，衛生対策，省力化対策，商品性向上対策，低コスト化の取組を行う中で，最初は失敗の連続があって自分の技術として確立してきた。

④法人化によるさらなる経営力の強化が必要で，人材確保と就業条件明確化，経営の多角化（飼料生産部門），地域活性化や地域支援システムの構築を現在検討中。

効率的管理を可能とする広い敷地の牛舎

防疫・疾病対策の基本となる煙霧消毒状況と煙霧器

効率的かつ食べ残し等の無駄を抑える飼料攪拌機

所有面積に適した大型機械（降灰事業等も活用）

省力化と発育向上に貢献する哺乳ロボット（哺育舎）

各所に手造りも加えた低コスト牛舎（子牛育成舎）

繁－29

【キーワード】
新規参入法人，自社建築牛舎
省力管理システム（分娩カメラ）

【経営概況】

1　経営形態
　肉用牛　繁殖経営

2　構成（労働力）
　従業員　6名

3　飼養頭数
　繁殖雌牛270頭

4　飼料作物
　夏作：ローズグラス　27ha
　冬作：イタリアンライグラス　1ha

5　経営の特徴
・企業の資本や機械等を活かし，スケールメリットの活かせる大規模経営に取り組んでいる。

・牛舎等の施設も各種資金等を活用しながら自社で建築。

・大島管内では2番目の経営規模であり，子牛出荷頭数は島内出荷の約2割を占める。

6　今後の目標
・子牛の生産率を高めるとともに，農地確保による自給飼料率の向上を図り，生産コストを抑える。

【経営発展の経過】

H5年～　建築業から事業の多角化のため，車エビ養殖や園芸品目にチャレンジ

H18年　農業生産法人を設立

H18年　簡易牛舎を建設し，導入した母牛7頭から畜産経営をスタート

H19年　育成・分娩・哺育牛舎及び堆肥舎を整備

H20年　外部成牛（妊娠牛）を導入し、飼養頭数　成牛140頭まで増頭する

H24年　新たに母牛舎・子牛牛舎を整備
　飼養頭数　成牛250頭（育成牛も含む）になる

【経営発展の過程で苦労した点】

・経営を始めた当初は自社従業員のみで農協や業者、県の普及指導員等の指導を受けながら、管理を行っていたが、思うような結果を上げることができなかった。

・そこで、地域で肉用牛を飼養している農家を雇用し、飼養管理などを担当していただくようにした。その結果、粗飼料の収量向上や繁殖率の向上、事故低減・子牛販売実績向上につながった。

多頭化に対応した作業の効率化

・哺育・育成・母牛管理を各従業員が専門管理

対面式カーフゲージによる哺育管理

・日齢毎のミルク給与の一括管理
・定期的な洗浄による衛生管理

→ 子牛の斉一性・疾病低減

繁殖管理システム（ソフト）の活用

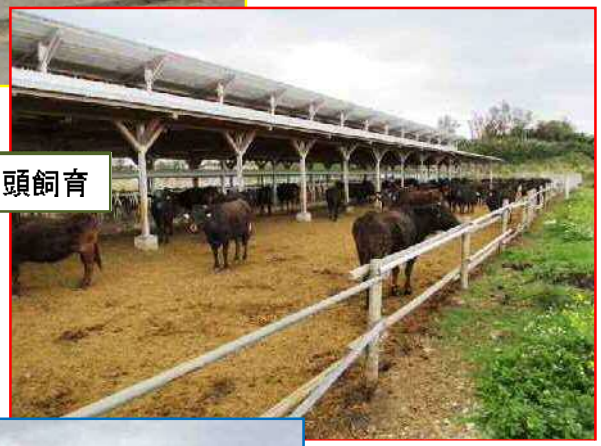
・繁殖成績等を一括管理。
・子牛販売実績の活用。
→ 母牛毎の成績・更新の判断

分娩監視カメラの導入

・夜勤担当の従業員が事務所内で母牛の状況を把握。
→ 事故率の低減。

企業の資本や機械を利用した施設整

自社建築の牛舎（母牛舎）



パドック形式による多頭飼育

多層型堆肥舎による完熟堆肥生産

繁－30

【キーワード】
低コスト経営，事業活用，繁殖牛管理システム
省力管理システム(哺乳ロボット)

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　繁殖経営

2　構成(労働力)
本人，妻，弟，雇用4名　計7名

3　飼養頭数
繁殖雌牛300頭

4　飼料作物
夏作：スーダングラス，ローズグラス　25ha
冬作：イタリアンライグラス，エンバク　6ha

5　経営の特徴
・地域に密着し，飼料用サトウキビや地域の未利用資源等を最大限に活用した低コスト経営を目指している。
・繁殖牛管理システム(全国300戸以上の農家に普及)の開発メンバーとして携わり，繁殖成績の数値化に取り組み，個体管理の徹底に努めている。
・人工授精師として，徳之島の肉用牛改良に貢献し，地域リーダーとして活躍している。

6　今後の目標
・繁殖雌牛300頭経営の確立のため，経営管理の効率化(法人化)，自給粗飼料確保による生産コストの安定化。

【経営発展の経過】

H元年　農業大学校卒業後就農(頭数8頭)
H5年　人工哺乳開始
H8年　子牛用スタンチョン導入
H15年　畜産基盤再編総合整備事業により牛舎・飼料畑造成。
哺乳ロボット導入・家族経営協定締結。
青色申告開始。
H21年　牛舎増築2棟
H23年　(株)きらめきサポート想設立に携わる。
H24年　資源リサイクル畜産環境整備事業により堆肥舎整備。
全国和牛能力共進会特別表彰受賞

【経営発展の過程で苦労した点】

・資金確保のこと
規模拡大に伴う資金繰り。

・規模拡大に伴う管理技術の習得。

補助事業を活用した規模拡

補助事業等を活用し，規模拡大を図っている

低コスト経営の実現にむけ

飼料用サトウキビや地域の未利用資源等を活用している

機械導入による省力化

哺乳ロボット導入による省力化

規模拡大に向けての個体管理

繁殖牛管理システムによる繁殖成績の数値化と管理の効率化

肥－1

【キーワード】
園芸との複合経営，後継者，良質堆肥生産
衛生対策（細霧装置，消毒ゲート）

【経営概況】

1　経営形態
　肉用牛 肥育経営
　露地野菜（甘藷8ha，ニンジン2ha，加工大根3ha）
2　構成（労働力）
　本人，妻，母

3　飼養頭数
　肥育牛110頭

4　施設概要
　肥育牛舎4棟　堆肥舎4棟　機械倉庫1棟

5　経営の特徴
・記帳により個体管理を徹底し，事故防止と質量兼備の牛肉生産に努めている。
・露地野菜との複合経営で良質堆肥生産に努め近隣農家へも還元している。
・細霧装置による定期的消毒など徹底した衛生管理により県畜舎環境コンクールで最優秀賞受賞。

6　今後の目標
・肉用牛情勢を見極め，露地野菜とのバランスも考慮しつつ，150頭規模まで増頭し，求められる良質な牛肉生産に努める。

【経営発展の経過】

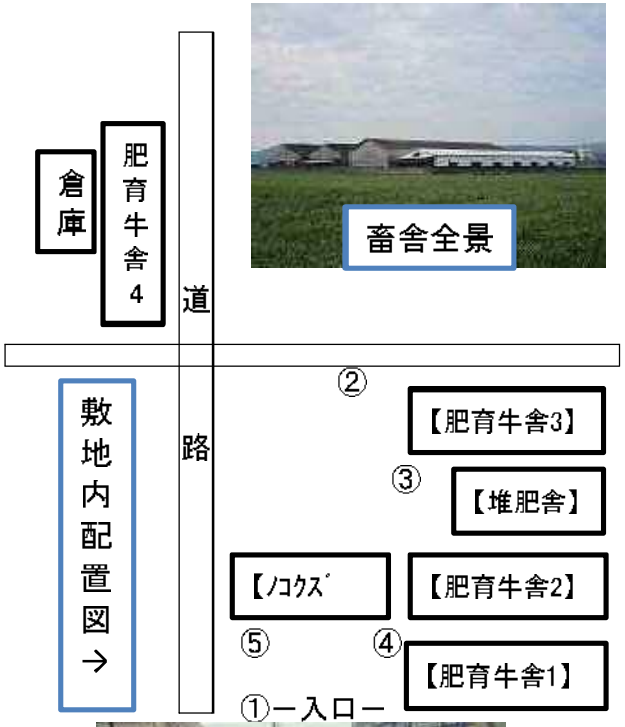
H8年　農業大学校卒業後，父経営（肥育牛100頭＋露地野菜）の後継者として就農
　就農に併せて，牛舎を新設し，150頭規模へ規模拡大

H13～14年　認定就農者（後継者）資金を活用し，46頭の肥育素牛導入
　当時，甘藷800a，ニンジン200aとの複合経営

H15年　自己資金で牛舎建設をし，肥育牛200頭規模へ規模拡大
　地下水をくみ上げ，タンクとスプリンクラーを設置し，牛舎屋根散水を実施
H22年　衛生対策として，細霧装置を導入
　県畜舎環境コンクール(肥育部門)で最優秀賞受賞
　父親が70歳を期に経営を勇退
H24年　父より正式に経営移譲，飼養規模は本人分の肥育牛110頭へ

【経営発展の過程で苦労した点】

・露地野菜との複合経営のため，農繁期は農作業及び飼育管理が重なり，労働時間が大幅に増えて体力的にも大変だった。
・肥育素牛及び飼料費高騰により収益確保が難しくなっているが，露地野菜部門で収益を確保できたため計画的な導入・出荷ができた。



畜舎全景

②消毒ゲート入場の際に噴霧

③堆肥舎

細霧装置を利用した消毒風景

①入り口はフェンスで入場制限

④整理整頓された牛舎内部

細霧消毒装置（ポンプ）

⑤井戸掘削による地下水タンク利用

・肥育牛管理台帳に導入出荷情報及び疾病・観察記録を、園芸部門は農作業日誌に記録し、家族との情報共有や経営把握に役立てている。

細霧装置を用いた衛生対策を実施
【細霧稼働パターン】
・夏場　20分おきに2分間　（6:00～18:00の間）
・冬場　2時間おきに2分間　（6:00～18:00の間）

肥－２

【キーワード】
複合経営，低コスト牛舎，高収益性
畜舎環境，経営把握

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛肥育＋甘藷　複合経営

2　構成(労働力)
本人，妻，後継者夫婦

3　飼養頭数
肥育牛370頭

4　経営面積
焼酎用甘藷　4ha

5　経営の特徴

・高い肥育技術と園芸により，収益性が高く自己資金の回転を重要視した経営を目指している。

・畜舎内は非常にきれいで，冬でも常に換気扇を回す，牛舎の外周に黒い寒冷紗を張る，飼槽幅が広い等牛のために畜舎環境を良好に保っている。

・自家配合により，コスト低減を図っている。

・パソコンを用いて肥育データ分析や簿記記帳等を行い，経営の把握に努めている。

6　今後の目標
・法人化による雇用確保及び労働環境の向上
・規模拡大による経営安定（目標500頭）

【経営発展の経過】

S47年	就農，父母と肥育牛10頭＋生産牛2頭　を経営
S55年	自宅横にて肥育牛100頭へ規模拡大
H4年	繁殖牛舎の隣接地に，新たな肥育牛舎を建設
H5年	配合飼料を自家配合に切り替えるとともに，繁殖牛舎の隣接地に2棟目の新肥育牛舎を建設
H10年	繁殖牛舎の隣接地に，3棟目の新肥育牛舎を建設
H11年	地ワラを縮小し，輸入ワラ主体に切り替えとともに，繁殖部門をやめて肥育専門になり，甘藷を作り始める
H16年	4棟目の新肥育牛舎を建設し，肥育牛300頭へ拡大
H18年	資源リサイクル畜産環境整備事業で堆肥舎を建設
H19年	後継者が就農し，肥育牛370頭へ規模拡大
H21年	5棟目の新肥育牛舎を建設

【経営発展の過程で苦労した点】

・自己資金の回転と労働力のバランスを考えて，常に一部一貫経営を行ったり，園芸等を組み合わせるなど，経営の安定を第一に考え実行してきた。

・牛舎はすべて，事業等を使わずに自己資金で，できる限り自分達で作り，低コストで建設してきた。

・以前は2時間以上かかるところまで行って数10ha分の地ワラを確保するなど，低コスト生産のための努力をしてきた。

飼槽が大きく，飼槽幅が広い。飼料は配合と
ワラを別々の飼槽に入れるようにしている。
牛舎は自己資金で，自分達も建設に携わっている。

部屋毎に1つずつウォーターカップが用意
されている。牛舎は並んで建っているものの
牛舎の間が広く，清掃しやすい構造。

自家配合の機械が通路にあるが，基本的に
通路は風通しが良くなるよう整理されている。
飼料はバケツで手作業で給与している。

牛舎の周囲，特に道路に面する外周は
黒い寒冷紗を張り，
牛が夜，車のライトに驚いたり
しないように配慮している。

冬でも常に換気扇は回している。
牛床は常にキレイで
牛はゆったり休んでいることが多い。

一貫 － 1

【キーワード】
経営分担型完全一貫経営

【経営概況】

1　経営形態
　肉用牛　完全一貫経営

2　構成（労働力）
　本人夫婦，後継者（31歳）　　計３名

3　飼養頭数
　繁殖雌牛　52頭　　肥育牛　70頭

4　飼料作物
　夏　作冬作後雑草利用　3.5ha
　　WCS　7ha（自家生産2.5ha，水稲農家生産4.5ha）
　冬　作イタリアン　7ha
　稲ワラ12ha

5　経営の特徴
・繁殖雌牛50頭の完全一貫経営の確立（H14～）。
・集落営農組織との連携により粗飼料確保と堆肥販売
・簡易畜舎で増頭
・機械の長期利用
・人工哺育をS63年から実施
・経営内役割分担（本人：飼料生産，肥育，妻：哺育，後継者：繁殖）

6　今後の目標
・集落営農の事業拡大と合わせて，増頭を図りたい。

【経営発展の経過】

S49年　高校卒業と同時に就農
　　父と経営を分けて40頭規模の肥育を開始
S52年　アメリカへ4ヶ月間派米研修
S53年　結婚
　　商系の肥育預託を7年間行う
S54年　繁殖雌牛10頭導入し，肥育まで行う
　　肥育預託と自己牛一貫生産
S63年　人工哺育導入
　　繁殖成績向上し，事故が減少
H11年　県単事業で32頭規模繁殖牛舎新築

H14年　繁殖50頭規模完全一貫体制構築

【経営発展の過程で苦労した点】

・就農当時から一貫経営を目指していたが，直後にオイルショックが起こり，前途多難な時期があった。

・預託肥育で経営の見通しができるようになった。

・粗飼料の確保

自然交配用雄牛

繁殖牛舎の内の一棟

子牛舎

肥育牛舎

肥育牛舎

肥育牛舎

一貫経営確立のために簡易牛舎で増頭を図った

一貫－２

【キーワード】
経営分担型完全一貫経営
低コスト牛舎

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　完全一貫経営

2　構成（労働力）
本人夫婦，後継者　　計3名

3　飼養頭数
繁殖雌牛50頭　肥育牛80頭

4　飼料作物
夏　作：ローズグラス0.8ha，冬作後雑草利用5ha
　　飼料用イネ0.4ha
冬　作：イタリアン＋ムギ混播6ha
稲ワラ 6.4ha（自家0.4ha＋地元農家から6ha購入）

5　経営の特徴
・繁殖雌牛50頭の完全一貫経営の確立（H23～）。
・パソコンの利用（簿記記帳，出荷計画・実績，飼料供給量等の経営管理）
・施設の低コスト化（畜舎の自主施行，自主修繕）
・機械の長期利用（自前でメンテナンス，修理）
・経営内役割分担（本人：繁殖雌牛，妻：哺育子牛，後継者：子牛育成～肥育）

6　今後の目標
・完全一貫体制を維持するために，計画的な繁殖雌牛の計画的な更新を図る。
・肥育成績の向上（特に枝肉重量の確保が課題）
・後継者の育成

【経営発展の経過】

S43年	農業高校園芸科卒業→就農
	父経営（ポンカン・温州ミカン＋肥育数頭）の後継者として就農
S50年代	柑橘類の縮小と同時に肥育牛の増頭が始まる
H1年	肥育牛への自家配合飼料給与のため攪拌機を導入
H3年	一部一貫経営に向け，繁殖雌牛５頭導入
H4年	パソコンを導入
H1年 ↓ H15年	繁殖雌牛の増頭（5頭から30頭へ）　肥育規模は80～100頭
H16年	後継者就農・牛歩導入・人工哺育開始
H18年 ↓ H20年	繁殖雌牛の増頭（30頭から60頭へ）　肥育規模は80～100頭
H21年	自給飼料不足から繁殖雌牛を50頭へ減らす
H23年	最後の外部導入牛出荷により，完全一貫経営がスタート

【経営発展の過程で苦労した点】

・一貫経営への道のりは非常に長かったが，地域の仲間と協力・情報共有を図り，ともに技術アップに心がけた。

・決して規模が大きいわけではないため，資金繰りにはとにかく苦労した。しかし，一貫経営となり肥育素牛生産にかかるコストは計算でき，経営の安定化につながっている。

・繁殖雌牛を３年間で倍増したが自給飼料が足りず，減らす結果となった。

人工哺育

畜舎は自主施工，自主修繕により低コスト化を図っている。

分娩舎にはカメラを付け，出産時の介助に役立てている。

一貫－３

【キーワード】
低コスト牛舎，経営分担型一貫経営
粗飼料自給率100%

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　一部一貫経営

2　構成(労働力)
本人夫婦，後継者(32歳)　　計3名

3　飼養頭数
繁殖雌牛65頭　肥育牛120頭

4　飼料作物
夏　作:冬作後雑草利用　6ha
　　WCS　8ha(自家生産4ha，水稲農家生産4ha)
冬　作:イタリアン　6ha
稲ワラ 20ha

5　経営の特徴
・自家生産の肥育素牛が約7割の一部一貫経営
・地域水稲生産者と連携し，水田を高度利用
・粗飼料自給率100%
・間伐材等を利用した低コスト牛舎
・段階的規模拡大
・経営内役割分担(本人:肥育，妻:肥育，後継者:飼料生産，繁殖)
・自然交配用雄の利用で高い生産率を確保

6　今後の目標
・完全一貫の体制にするために，計画的な繁殖雌牛の更新と導入を図る。
・子牛育成牛舎を整備する。

【経営発展の経過】

S50年 勤めを辞め就農
　　20頭規模の肥育を開始(開始当初は乳雄やF1も行った)
S55年 結婚し，さらに20頭規模の施設を増設
S62年 20頭牛舎を1棟取壊し，60頭規模肥育牛舎新築
H1年 繁殖雌牛5頭導入
H4年 繁殖牛のつなぎ施設設置し，繁殖牛が15頭になる
H5年 40頭規模肥育牛舎新築
　　現在の肥育120頭(当時は160頭収容)の施設が全て完成
　　肥育技術向上に取り組む
H13年 中通路式の繁殖牛舎(片側20頭)を新築
　　分娩房などが不足し事故が多発した
H21年 40頭規模繁殖牛舎新築
　　繁殖70頭，肥育120頭の施設が完成
H26年 繁殖70頭の完全一貫経営へ向けた検討会をスタート

【経営発展の過程で苦労した点】

・経営開始のための資金確保に苦労した。

・がんばってできることは，何でもしてきた。

・売上確保のため，常に目標を設定して，計画的に規模拡大してきた。

・繁殖技術，育成技術の未熟さから，生産性の低迷，事故などを経験した。

・十分な粗飼料を確保する体制の構築

繁殖牛舎

肥育牛舎

育成技術

ミルメーカー

子牛の高さに合わせた手作り飼槽

子牛牛舎の屋根に断熱材

細霧機能を備えた換気扇で
消毒液を空気中散布
（風邪・肺炎等の対策）

一貫－4

【キーワード】
事業活用，空き施設（鶏舎）有効活用
稲わら確保，経営分担型一貫経営

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　一部一貫経営

2　構成(労働力)
本人夫婦，後継者夫婦

3　飼養頭数
繁殖雌牛70頭，肥育牛180頭

4　飼料作物
夏　作：ローズグラス　0.7ha
冬　作：イタリアン　0.5ha
稲わら：10ha

5　経営の特徴

・鶏舎改造による肥育牛舎への活用
・地域の稲わらの確保による低コスト化

・後継者による人工授精
・家族間での役割分担の明確化
・肉用牛情勢に応じて、子牛市場での売却など、資金の回転育成を重視した経営を目指している

6　今後の目標

・繁殖雌牛100頭による一貫体制の確立を図る。

【経営発展の経過】

H4年～	ブロイラー経営の傍ら簡易牛舎で生産牛10頭を導入し肉用牛生産部門の開始。
H7年	ブロイラー経営を中止し，鶏舎を改造して肉用牛肥育部門を開始。農協預託150頭規模，管理方法：つなぎ飼い・自家配
H12年～	牛舎の改修を行い、つなぎ飼いからパドック管理に変更。
H13年	濃厚飼料を自家配から鹿児島黒牛「極」前期・後期に変更。
H18年	畜産基盤再編総合整備事業により，80頭規模繁殖牛舎，飼料庫を整備
H18年	長男が就農。生産部門と人工授精を担当 生産牛（20頭）の増頭を開始
H24年	自走ロールベーラを導入。稲ワラ5ha
H25年	稲ワラ5haから10haに拡大

【経営発展の過程で苦労した点】

・肥育部門開始時には，鶏舎を改造した肥育牛舎が繋ぎ牛舎でスタートしたため、肢蹄の事故等が多く苦労した。

・その後再度改修し，パドック化にすることで、枝肉重量と事故防止の改善を図った。

鶏舎を改造した肥育牛舎

畜産基盤事業で整備した繁殖牛舎（80頭規模）

自走式ロールベーラーによる稲わら確保

一貫－5

【キーワード】
一貫経営，稲WCS生産・利用

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　繁殖肥育一貫経営
コントラクター　35ha

2　構成
本人，後継者（娘夫婦），雇用常時2名　計5名

3　飼養頭数
繁殖雌牛120頭，肥育牛160頭

4　飼料作物
夏作：ミュレット2ha，稲WCS5ha
冬作：イタリアン8ha
コントラクター　35ha

5　経営の特徴
・Uターン後肥育経営を開始し，粗飼料生産開始と共に繁殖部門を開始
・コントラクター組織の主オペレーター
・肥育素牛は，自家産の割合が9割以上
・稲わらは出水市内だけで8haを収集

6　今後の目標
・繁殖雌牛170頭，肥育牛240頭への規模拡大し，完全一貫経営を目指す。
・本人が繁殖部門，後継者が肥育部門を担う経営管理

【経営発展の経過】

S61年	大学卒業後勤務した会社を退社
S61年	青年海外協力隊員として派遣
S63年	帰国後，父母経営肥育牛96頭の後継者として就農
H6年	近隣の粗飼料生産農家と連携し，粗飼料生産及び繁殖部門開始 畜舎増築及び新規建設，後継者育成資金等を活用して家畜を導入
H15年	簡易牛舎建設（県単独事業）
H22年	コントラクター組合結成，WCS専用機等の導入（地域振興推進事業，改良資金）
H24年	育成牛舎建設（地域振興推進事業）
H25年	後継者の就農

【経営発展の過程で苦労した点】

・H6年以降の繁殖部門開始時は主として輸入粗飼料を利用していたが，品質が安定せず，購入単価も上昇してきた。また，自給粗飼料は水田地帯で畑地が比較的少ない当地域では粗飼料生産用のほ場確保が十分に出来ず，繁殖雌牛の増頭が進まなかった。

・稲WSCのコントラクター組合結成以降，粗飼料確保は十分に出来たが，主オペレーターであったため，作付面積増加に伴い適期刈り取りが出来ないなど，これまでの規模拡大も含め深刻な労働力不足に陥った。

・後継者確保により肥育成績も安定し，一層の規模拡大が可能となった。

WCS収穫風景

良質なWCS

牛舎風景

H26年度はSGSにも取り組む

十分な粗飼料を確保

一貫－６

【キーワード】
事業・資金活用，経営分担型一貫経営
県産稲わら確保，良質堆肥生産，優れた肥育技術

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　一貫経営

2　構成(労働力)
本人夫婦，後継者夫婦，雇用3名

3　飼養頭数
繁殖雌牛130頭
肥育牛　500頭

4　飼料作物
夏　作：スーダングラス，ローズグラス　5ha
冬　作：イタリアン5ha

5　経営の特徴

・経済連に委託配合した独自の濃厚飼料や，姶良地区を中心とした県内産にこだわったイナワラ給与により，安心安全な牛づくりに努め，質・量を兼ね備えた枝肉づくりを実現している。

・堆肥化施設を活用し，農協を通じて園芸農家等に販売されている堆肥は評価が高く，堆肥コンクールでも上位入賞を果たしている(H23～H24)。

・後継者は繁殖牛を経営し，子牛は粗飼料給与による腹づくり，骨格づくりを重視した「のびのび・すっきり育成マニュアル」に沿った飼料給与を行い，肥育管理への移行がしやすい素牛として経営主に供給され，一貫経営のメリットが活かされた，肥育経営が行われている。

・農大生研修を毎年受け入れ，後継者育成に力を注いでいる。

6　今後の目標

・現在の経営規模を維持しながら，高能力な生産素牛への更新や肥育技術の向上に努め，市場評価の高い肉牛づくりに努める。

【経営発展の経過】

S40年代	経営主，肉屋経営から，養豚跡地を間借りして牛5頭で肥育経営開始 徐々に規模拡大に取り組む。
H11年	畜産環境整備リース事業活用により，堆肥施設，機械を整備する。
H16年	法人設立。
H16年	畜産振興資金や市単独資金を活用し，肥育素牛を導入する。
H17年	牛舎を現在地に移転，飼養施設を整備する。 後継者が就農，新規参入円滑化モデル事業に参加。 牛舎・堆肥舎等施設整備及び繁殖牛100頭の導入を行う。
H18年	スーパーL資金活用により，土地取得及び肥育素牛を導入。 更なる規模拡大を図る。
H19年	第9回全共，第8区若雄後代検定牛群の部に出品。
H20年	農業近代化資金活用により，事務所及び堆肥舎を整備。
H24年	JA中央及び関係機関との飼養管理現地検討会を開始。 体重測定，及び飼養管理検討を毎月行っている。
H24年	第10回全共，第8区若雄後代検定牛群の部に出品，肉付賞受賞。

【経営発展の過程で苦労した点】

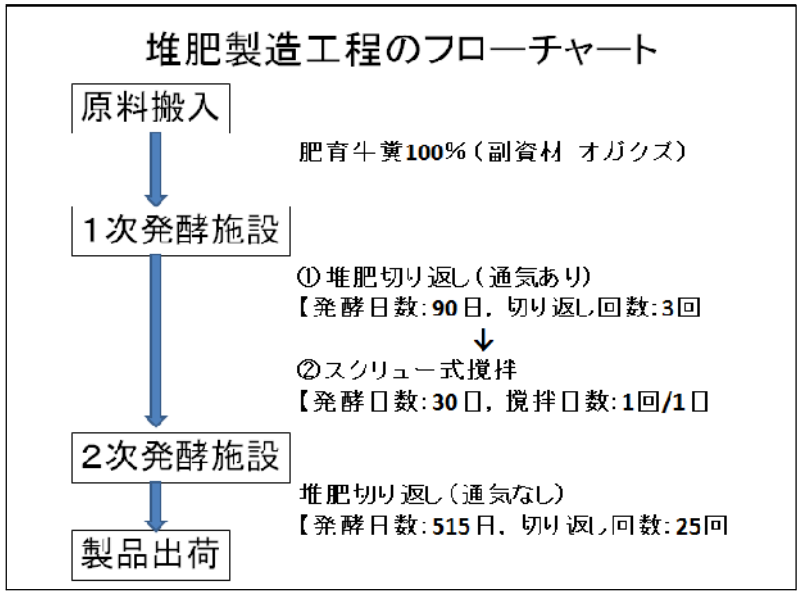
・市場性の高い枝肉作りについて
　肉屋から必要とされる市場性の高い枝肉づくりを常に考えながら，子牛生産部門の早い段階からの肥育管理へのスムーズな移行を念頭に置いた飼養管理や，枝肉が直接評価される京都市場への出荷と枝肉成績の飼養管理へのフィードバックを行い，高品質な枝肉づくりに心がけている。

・糞尿処理，畜舎環境整備や良質堆肥生産のこと
　鹿児島市内では，糞尿処理を怠れば，畜産経営は成り立たないことから，人に迷惑をかけないことを常に考え，畜舎環境の整備や良質堆肥生産による周辺施設栽培団地など園芸農家との信頼関係の構築に力を注いだ。

作業効率の良い繁殖牛舎

うず高く積まれた県内産稲わら

堆肥生産施設



堆肥生産フローチャート

一貫－7

【キーワード】
分業型一貫経営，未利用資源活用
省力管理システム

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　肉用牛一貫経営

2　構成(労働力)
構成員4.5人，雇用2.5名　　計7.0名

3　飼養頭数
繁殖雌牛200頭，肥育牛350頭

4　飼料作物
夏　作：スーダングラス，ソルガム　14ha
冬　作：イタリアン12.5ha
稲わら：10ha
甘藷つる：20ha

5　経営の特徴

・肉用牛一貫経営にいち早く取り組み，経営内での分業体制を確立させ，素牛の価格変動リスクを回避している。

・地域未利用資源としては，甘藷つる20ha，稲わら10ha，焼酎粕600tを利用し，コスト低減に努めている。

・TMR混合機，フォークリフト粗飼料給与機，分娩監視システム，哺乳ロボットを導入するとともに，パソコンによる個体管理を行い，省力化や分娩時事故防止をを図っている。

6　今後の目標

・飼養規模1,000頭の経営確立のため，飼養管理，自給飼料確保の効率化を図る。

【経営発展の経過】

S48年	畜産講習所卒業。父経営（肥育100頭）の後継者として就農。併せて人工授精業務開始
S57年	繁殖雌牛5頭を導入し，一部一貫経営を開始
S61年	若手20名で肉用牛研究会を設立し，新技術等(除角，連動スタンチョン)の導入により事故防止，省力化を図る。
H7年	繁殖雌牛45頭，肥育牛100頭
H13年	次男就農，ロールベールサイレージを主体にTMR給与を開始
H15年	長男就農
H17年	繁殖雌牛135頭，肥育牛250頭に規模拡大し，頭数増に対応するために哺乳ロボットを導入
H22年	分娩監視システムを導入
H26年	畜産基盤再編総合整備事業により，畜舎・堆肥舎を整備（目標飼養頭数800頭が可能となる）

【経営発展の過程で苦労した点】

・H2～3年の素牛高騰時は，導入価格より安い出荷価格となり，多くの負債を抱えた。

・一貫経営は回転が遅いため，生活費を人工授精でまかない，投資には制度資金を活用し，繁殖部門は自家保留主体ですすめるなど堅実な資金計画をたて実践した。

・役割分担を明確にしているが，情報共有のため定期的に関係者を交えた経営検討会を開催し各部門の課題を明確にしている。

・肉用牛研究会など仲間作りによる情報収集に努め，効率的な経営手法等を学習してきた。

○ 畜舎全景

TMRミキサーで未利用資源（焼酎粕・甘しょつるも有効利用　↓

→ほ乳ロボットによる省力化

→繁殖管理の見える化

一貫－8

【キーワード】
新規参入，事業・資金活用，情報交換
一部一貫経営，稲WCS生産・利用

【経営概況】

1　経営形態
肉用牛　一部一貫経営

2　構成(労働力)
役員3名，従業員10名　　計13名

3　飼養頭数
繁殖雌牛　170頭，肥育牛　1,000頭

4　飼料作物
夏　作：飼料用稲27ha，スーダングラス2.7ha
冬　作：イタリアン14ha
稲わら：10ha

5　経営の特徴

・耕作放棄地・水田裏及び飼料用稲・稲わら等の地域資源を有効に活用した低コスト経営を目指している。

・価格や品質・安全性等について，消費者・購買者の要望に応えるために，完全一貫経営の確立及び飼料自給率の向上に努め，併せて疾病対策等を実施している。

6　今後の目標

・繁殖部門の拡大により，完全一間経営を目指している。

【経営発展の経過】

H13年～	帰郷後，新規参入（繁殖雌牛経営開始） 制度資金で畜舎(50頭規模),堆肥舎,繁殖雌牛50頭を整備・導入
H15年	一般資金により，子牛牛舎を新築
H16年～	地域の畜産若手部会で飼養技術，経営手法，資金活用，国県市町施策等を学ぶ
H19年	肥育経営を行う弟と法人化により合併し，一般資金で肥育牛舎(300頭規模)，畜環リースで堆肥舎を整備し，繁殖牛50頭＋肥育牛400頭規模となる。
H23～24年	畜産基盤再編総合整備事業活用により，300頭規模牛舎，堆肥舎を整備し，繁殖牛50頭+肥育牛900頭規模となる。
H24年	県単事業活用により飼料用稲収穫機械を導入。作業受託を開始し，稲WCSによる粗飼料自給率向上を実現。
H25年～	完全一貫経営を目指し，繁殖雌牛の増頭し，現在170頭飼養。

【経営発展の過程で苦労した点】

・牛の見方と経営手法を習得するために，就農当初は家畜商業を行いながら，様々な農家の経営形態及び技術を学んだ。

・地域農家・関係機関等との協力・連携，出荷先等との連携を強化することにより，経営の効率化を図り，経営実績に基づいた資本調達等を行った。

就農当初の牛舎（繁殖雌牛の群飼舎）

哺乳子牛の群飼房(6頭)と飼槽

肥育牛の自動給餌機と牛房毎に個体情報を掲示
（粗飼料は，フォークリフトで自動細断及び給餌）

耕畜連携で確保した粗飼料保管状況